

白き月と黒き月

灰恵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見えざる帝国が崩れた。それは戦争に勝利したことを意味していた。しかし、同時に一護の霊圧が消えて……？

※注釈：千年血戦後を未来捏造してみた。各話に出てくる主なキャラクターをサブタイトルにつけました。

P i x i vにも投稿しています。

目次

千年血戦後・霊虚王編

目覚めぬ太陽01 (夏梨十一護の友達)	1
目覚めぬ太陽02 (ユーハバツハ+白一護+斬月)	6

千年血戦後・霊虚王編

目覚めぬ太陽01（夏梨＋一護の友達）

一護

一兄

お兄ちゃん

黒崎くん

黒崎

一護！

ああ、聞こえてるよ。

—— 尸魂界 ——

あたしと遊子はヒゲ親父に連れられて、死神たちが住む尸魂界つてとこに来た。正確には瀨霊廷という場所らしいが、詳しい話はされなかつた。

ただ、ここに一兄がいるってこと。

あの日、一兄が夜、友達と一緒に浦原さんの所に行ったつきり、帰つて来なかつた。

死神の力を取り戻した一兄のことだから、またどつかで誰かを、何かを護りに行ったんだらうなって思ってた。

三日経って、一週間経っても帰って来なかつた。

いや、一応は帰って来た。中身は違うけど。遊子は気付かなかつたみたい。

ある日、井上さんや茶渡さんが暗い顔をしているのを、学校帰りに見かけた。

—— 一兄に何かあったんだ。

一緒に行った友達は帰ってきているのに、一兄は帰って来ない。

—— 一兄に何かあった。

その確かな確信を持てたのは、何かを知っているであろう浦原さんがいる浦原商店に走って向かう途中で、親父に呼び止められ肩をつかまれた時だった。

普段なら絶対にしないような真剣な顔

「親父」

「どこに行くんだ。 夏梨」

「……浦原さんの所」

「一護のことか？」

「!!」

核心を突かれて、親父の顔を食い入る。

「知ってるの？ 一兄に何かあったこと」

「まあな」

親父はバツが悪そうに顔をかいた。

「教えろ。何があったの？ なんで一兄は帰って来ないの!？」

あたしは親父の胸倉を取って、問い詰めた。

「一護は尸魂界にいる」

「ソウル……何？」

聞きなれない言葉に聞き返す。

「わかりやすく言えば、死神がいる世界だな」

「——一兄の居場所がわかってるのに、なんで帰って来ないんだよ」

親父がそういうことに詳しいのか。それを問い詰める余裕はなかった。

「一護は今、手が放せねえ状態だな。帰って来れねえんだ」

「なんだよソレ。ごまかしてないで、はっきり言えよ」

親父はため息をつく。

「俺にもよくわからねえんだ」

「は？」

「いや、わかりたくねえんだよ。今の一護がどういう状態なのかを——」

頭は理解してても心が否定する。

親父の心境はまさにそれだったのだろう。

心のどこかで一兄は大丈夫。一兄は生きてる。そう言い聞かせていた。

この目で実際に見るまでは——

あたしたちはある扉の前に立たされた。扉の向こうに一兄がいるらしい。

でも、扉越しでもわかるぐらい、プレッシャー——霊圧——を感じる。一兄の温かい感じじゃない。もっと、物々しい気配だ。

「心の準備はいいですか？ 絶対にそのマントを脱がないでくださいッスね？ フードを取るのもダメッスよ？」

ここに来る前に渡された黒いマントのフードを深くかぶる。そうすることで、だいぶ霊圧から解放された。

「ねえ、本当にここに一護がいるの？」

共にこちらに来た一兄の友達——有沢たつき——が不安な声をあげた。

「ええ、もちろんッス」

「うそだろ!?! 前会った奴より、ヤバい感じじゃねーか!」

浅野啓吾は霊圧の良し悪しが多少わかっていた。

以前空座町で出会った藍染よりもっと悪質で質の悪いもの——足の裏から伝わる地面の感覚が消え、真つ逆さまに暗闇に落ちるような感覚がする霊圧——であることが、マントで緩和されているといっても伝わってきているのだ。

とてもじゃないが、こんな霊圧を放つのが一護であるはずがないと、にわかには信じがたい話であった。

「一護はどんな状態なんですか？ 俺たちがここに呼ばれたのも、意味があつてのことなんでしよう？」

小島水色は冷静に状況を分析する。

「話が早くて助かります。……黒崎サンは今現在、一か月ほど前にこの尸魂界を襲撃した敵と戦い続けているんです。——黒崎サンの精神世界でね」

「精神世界？」

「内なる世界とも呼ばれる、斬魄刀側の世界のことをいいます。黒崎サンはそこに敵を誘い込んで、敵が現実世界に干渉しないようにしているんですよ。実質、たつた一人で強大な敵と戦っているようなものだ」

「そうさせたのは、アンタたちじゃないのか？」

たつきの厳しい目に、浦原は首を振る。

「確かに、結果を見ればそうかもしれませんが。我々は止めることができなかつた。黒崎サンがこうなってしまったのも、我々の力が足りなかつたからとしかいいようがありません」

「だとしても……」

夏梨に注目がいく。

「一兄がほつとくわけないよ。ここに来るまで、周りの様子を見てたけど、どこもかしこも、壊れてた。いろんな人が泣いてた。一兄が黙ってるはずないんだ。だって……」

夏梨はぐっと、涙をこらえる。

「死神の時の一兄、すごく輝いてた。これで皆を守れるって。皆が傷ついてるのに黙って見過ごすなんて、できるわけないよ」

死神の力を失った一兄の顔と、死神の力を取り戻した後の一兄の顔を見比べても、どっちが一兄にとってよかったのか。聞くまでもなかった。

それがわかっているのだろう。

非難したたつきも、他の皆も何も言えなかった。

静寂を破ったのは浦原だった。

「そこで、皆さんにお願いがあるんす」

「お願い？」

「黒崎サンは確かに、一人で戦っています。しかし、どうやらこちらの声は届いているようなんすよ」

「それって……」

「応援、してくれませんかね。一人で戦っているわけではない。と」

一筋の光が見えた気がした。

目覚めぬ太陽02（ユーハバツハ十白一護十斬月）

刃と剣がぶつかり合い火花が散る。それを何度も繰り返し、お互いの攻防が続いていた。

「やっぱ、埒らちが明かないか」

「無駄なことだ。私をココに閉じ込めれば戦いが終わったと、本気で思っているのか」

「うるせーよ。俺が諦め悪いの知ってんだろ。『斬月』」

「ふん。まだ、言うか」

「何度でも、言つてやるさ。お前は『斬月』だつてな」

再びスピードを上げ、切りかかる。

天を突かんばかりの摩天楼の群れだった精神世界は、中途半端な正解の一護とユーハバツハの衝突によって、近代的なビルと洋風な城が混ざり合い、混沌とした世界が広がっていた。

天気は荒れ、風が吹き、雨が降り、嵐となって、海と化す。霊圧が海を荒し、水が干上がる。

「はあああああああ!!!」

ガキンツ!!

その割合は、徐々に徐々に洋風な造り——「ヴァンデンライヒ見えざる帝国」——に傾いていった。

ここは一護の精神世界。世界の在り様がどちらかに傾いているか。一目瞭然であった。

破れた死覇装の隙間からボタボタと血が流れる。滅却師特有のブルートヴェーネ静血装すら効かない。滅却師にとって虚の力は毒であっても、歴然とした差が開いていた。

「はあ、はあ……」

以前、最後の月牙天衝を教わるために、天鎖斬月と刃を交わした時よりも、数倍危険な戦いを一護は強いられていた。

—— 王よ。俺に変われ。あの野郎をぶった切つてやる。だめだ。

—— なんでだ。アイツはもう、斬月さんじゃねーんだぞ。違わねえよ。

—— いいから、変われ!! 死なれたら、困るんだよ!

一護は、フツと笑った。

なんだ、心配してくれるんだな。

—— な! してねえよ!

今の“斬月”はユーハバツハかもしれねえ。

—— なら!

でも! 感じるんだ。アイツの剣から、オッサンの意識が!

—— ……

たぶん、オッサンも戦ってるんだよ。アイツの中で、抗ってるんだ。

—— 斬月さんが勝つ前に、お前が死んじゃう……
死なねえよ。

白一護は首を振る。

—— 俺がわからねえと思ってるのか。もう、ユーハバツハにここが侵略されてんのが。希望に満ちたこの世界が、時間を追うごとに絶望し始めている。……お前が壊れる!!

「がはっ!!」

一護の口から、傷口から白い塊があふれる。虚の力が一護を包み込まんと、体を覆っていく。

「ほう、最後の悪あがきか」

「斬月」——一護に精神世界に引きずり込まれたユーハバツハ

——は、にやりと口元を歪ませ、三つの目玉でその様子を見ていた。内なる虚が出てくる。それはつまり、一護に命の危機が訪れていると同時に、すでに詰んでいるということだ。

顔から頭にかけて仮面に覆われ、頭に二本の角が生える。肌は白く覆われ、胸には穴が開く。

『ガアアアアアアアア!!』

—— やめろ! 斬月!!

体の支配権を白一護に奪われ、一護の意識は闇の奥底へと沈んでいく。

二本の角の間から霊圧が凝縮され、虚閃^{セロ}が放たれる。

ユーハバツハは外殻^{ブルトヴェーネ・アンハーベン}静血装——体外にまで拡張された静血

装——によって防ぐ。

完全虚化となった一護は一瞬の際に背後に回り込み、月牙天衝を纏った刃がユーハバツハを襲う。

しかし、外殻^{ブルトヴェーネ・アンハーベン}静血装は継続していた。

「無駄だー!」

一護の能力を奪うために血装^{ブルト}が伸びる。

持ち前のスピードでそれを回避。囚われれば終わることを本能は感じ取っていた。

ここに、この世界にユーハバツハを閉じ込めておけば、少なくとも現実世界は護れる。

しかし、敵か味方かわからないオッサンとの終わりの見えない戦いは徐々に一護を苦しめていった。

目的を見失うほどに……—

——ダメだ。まだ、終わっちゃいねえんだ……

いいや。もう、分かってるだろ？

聞こえるだろ？

外に満ちた戦争から解放された歓喜の声。

滅却師への恨みの声。

待っていない。

誰も、

死神がずっと守って来た霊王を殺したお前を。

誰も待っていない。

——違う……違う!!

お前は、独り。

——ひとりなんかじゃ……ねえ。

ほら、味方であったアイツも今じゃ敵だ。

殺しあっているユーハバツハと白一護の様子が見える。

お袋を殺したアイツが憎いだろう？

——……

さあ、殺しあえ。

憎しみ合え。

そして、崩壊しろ。

さすれば、ここは、この世界全て、我らのモノ真世界城となる。

—— ……ご、……一護！

頭上から差し込む一筋の光に顔を上げる。

—— 一兄。負けんな。

夏梨？

—— お兄ちゃん、頑張つて！

遊子

—— 負けないで、黒崎くん。

井上

—— 一護。

チャド

—— 一護、根性みせろよ

たつき

—— いっちごー！ 勝てよー！

啓吾

啓吾さん、そんな大きな声上げなくても聞こえてますよ。

水色

一護く、今度、一緒に酒飲みましよ！

乱菊さん

馬鹿か松本。こいつはまだ、未成年だ。

冬獅郎

おい、てめえ。いつまで寝てんだ？ 暇だろ？ 俺と殺り

あえ。

剣八

隊長。一護は寝てても、まだ戦ってるんですよ？

弓親

早く、起きねえと隊長がしびれ切らすかもなあ？ 一護

一角

さっさと起きろよ。一護。隊長が首長くして待ってるぜ。

恋次

礼を言うにはまだ早い。

白哉

一護！ さっさと起きぬか！ 馬鹿者!!

ルキア……！

パキリ

虚の仮面に亀裂が走る。

「む」

「独りじゃねえ。俺も、アンタも」

虚の皮が剥がれ落ち、朽ちて消える。

「アンタの剣から伝わるのはなにも、憎しみだけじゃねえ。悲しみだけじゃねえ」

一護の瞳に光がともる。それはとてつもない強さを持つ。

「俺は決めたぜ、オツサン」

「何？」

「アンタを倒して、オツサンを取り戻す。アンタとオツサンが同じっていうんなら、何度も倒して、俺の強さをアンタに叩き込む」

一護は斬月を構える。

「だからアンタのこと、〃斬月〃って呼ぶぜ。アンタもアイツも俺の力なんだからな」

海の底に声が光となって降り注いでいく。

「俺はアンタを超えるぜ」

「くくくっ……」

闇より生まれし我が息子の言葉に、内側から湧き出る歡喜に声が漏れる。

「やってみるがいい。黒崎一護!!」